

マタイ26章39節 「イエスの受けられた杯」

1A 罪から来る離別

1B 神からの離別

2B 結婚の破壊

3B 仕事からの疎外

4B 園からの除外

2A 杯の意味するもの

1B 苦しみの杯

2B 神の御怒りの杯

3A 「できますならば」

1B 十字架以外の救いの可能性

2B 十字架のつまずき

4A 「あなたが望まれるままに」

1B 御父への信仰

2B 御父への従順

3B 御心の優先

本文

マタイによる福音書 26 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びはマタイ 26 章の前半部分まで来ています。午後礼拝で、26 章 31 節から見て行きたいと思います。前回は、イスカリオテのユダが裏切るところを見ましたが、今回はペテロがつまずくところを見ます。けれども今朝は、人類の歴史の中で最も大きな葛藤と言ってよいでしょうか、霊の戦いと言ってよいでしょうか、その部分を見ます。キリストがゲツセマネの園にて祈られた苦悩の祈りです。「26:39 **それからイエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈られた。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」**」

1A 罪から来る離別

26 章後半は、とても悲しい話から始まります。それは、弟子たちがイエス様から離れて、散り散りになってしまうというイエス様の予告です。これまで約三年半の間、イエス様と寝食を共にして過ごし、全てを投げ打ってイエス様について来たその弟子たちのつながりは、とてつもなく強いものであったはずですが、ところが、この出来事でみなバラバラになり、イエス様がただ独りになられたのです。

イエス様は、最後の晩餐の場所から、オリーブ山のゲツセマネの園に移って来られました。ゲツセマネとは、「オリーブの圧搾場」という意味です。今でも遺跡でオリーブ油を抽出するための圧搾機の跡があり、それを復元したものがイスラエルに数多くありますが、一番油、二番油、三番油と三回圧

搾します。一番油が最も純粋で高価であり、神殿の燭台の灯のために使われ、二番油が食用、三番油がその他の用途に使いますが、まるでイエス様が祈られた祈りが、それを物語っているかのようです。ご自身は、御父によって与えられた杯を過ぎ去らせてほしいと願われていますが、しかし御父の願われることを選ばれます。その祈りが三度あります。そこで主ご自身が搾されたのですが、それでもそこから絞り出されたのは、神の御心そのものであり、後に全人類の罪を赦すための贖いを行われました。

イエス様は、弟子たち十一人と共に園にまでいらしています。すでにイスカリオテのユダはいません。園の入口に八人を座らせたのでしょう、そして祈るためにペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて行かれました。そして、「悲しみもだえ始められた」とあります。「悲しみのあまり死ぬほどです。」とも言われました。そして「一緒に目を覚ましていなさい。」と言われて、共に祈るように言われました。ところが彼らは夜になっていて、眠ってしまいます。この三人からさらに、進んでいって、イエス様はお独りで祈られます。そして、御父から杯が差し出されていたことを、これを過ぎ去らせてくださいと祈られます。これは、本質的に御父からも見捨てられることを示す杯です、後でさらに説明します。つまり、イエス様は弟子たちから見捨てられ、たった独りになされるだけでなく、御父ご自身からも見捨てられ、捨て置かれた方になられるということです。ここにこそ、イエス様の苦悩が究極のものとなりました。しかし、それはご自身が身代わりとなられて、人々が神と一つになり、また互いに一つになるため、その回復のための一歩だったのです。

1B 神からの離別

罪というのは死をもたらすと、ローマ6章23節などに書かれています。その死の本質は、「離別」と言えます。反対の「命」というのは結ばれていること、結合していることを示しています。神が命の源であり、神ご自身も三位一体の交わりという結びつきがあります。そこから流れ、神にあって他の人々とのつながりがあり、そして自然などとのつながりがあります。命が流れるのです。しかし、罪によってそれが一つ一つ遮断されます。今の社会を見てみましょう、私たちは全く罪の下に置かれた世界に生きていると思いませんか？確かに、戦争は起きていません。飢えてもいません。けれども、人と人とのつながり、社会と人とのつながり、そしてそれ以上に、自分がなぜ生きているのを教えてくれる神とのつながりが、断絶されています。これこそ、「死」と呼ばずして何でしょう。生きているけれども、死んでいる状態です。

今、ゲツセマネの園でイエス様が祈られています、エデンの園で大きな事件が起こりました。罪の始まりが書かれています。神は、園の中央にある善悪の知識の木から取って食べてはならないと言われました。けれども蛇がエバを惑わし、そしてエバから受け取ったアダムのその実を食べました。それによって、神の言われた通り死んでしまいました。けれども、肉体がすぐに死んだということではありません。主なる神がその中を歩き回っていました。アダムとエバがその音を聞きました。風というのと霊はヘブル語では同じ言葉なので、神の御霊の音を聞いたようにも読める箇所です。それに触れて、彼とエバは恐れて、自分たちの身を隠したのです。この時点で、神との断絶が始まっていま

す。霊的な命の源であられる神から離れているのですから、この時点ですでに死んでいるのです。

蛇にエバがどのように惑わされたかといいますと、「あなたは神のようになって善悪を知るようになる」と言っています。全ての善悪の判断を、神とのつながりによって下さなければいけないのに、自分自身で判断できるようになるという誘いです。いちいち神に聞かないといけないのか？と思うではないでしょうか、自分で判断できることはたくさんあると思われるかもしれませんが、しかし、そこが悲劇なのです。自分で判断するということが、祈りも、神への思いもなく行っていくことは霊的には死んでいるも同然です。

2B 結婚の破壊

そして神は、なぜそこから身を食ったのかを問い質されると、アダムは「私のそばにいたようにあなたとあなたが与えてくださったこの女が、あの木から取って、私は食べたのです。(3:12)」と言いました。この責任転換によって夫婦の絆が切れてしまっています。神が女に対して宣言された呪いは、「あなたは夫を恋慕うが、彼はあなたを支配することになる。(3:16)」というものです。ここで「恋慕う」というのは「支配する」と言い換えることができる言葉になっています。つまり、男をわがものとする、支配したいと思っても、支配されるということです。神にある愛の関係、対等の関係ではなく、競争する相手、あるいは支配まで使用とする関係になるということです。一つとなると約束された結婚が破壊されています。

3B 仕事からの疎外

そしてアダムは、神から仕事を任されていたが、「苦しんで食を得ることになる(3:17)」という呪いを受けました。仕事における充足感、神との共同の働きが壊れてしまっているのです、仕事をしていても疎外感をいつも抱いていないといけません。こうして、神から離れ、互いの関係が崩れ、また社会的にも仕事において疎外を感じるという事態になってしまいました。

4B 園からの除外

そして二人は、エデンの園から追い出されます。園から追い出されるというのは、そこにあるいのちの木から実を取って食べることができなくなることを意味します。そこにある神のいのちの豊かさを味わえなくなることを意味します。そして、私たちの生きている世界はまさにその延長であり、云わば神の園の外の中にあるのです。

ですから、お分かりになられるでしょうか、イエス様がゲツセマネの園に入られて、そこで祈られたというのは、アダムによってもたらされたすべての事を、ご自分が身代わりに受けられるためであり、身代わりに受けられることによって、取り返しもつかない過去を、神の方法で取り返すことなのです。イエス様は、コリント第一 15 章で「最後のアダム」と呼ばれています。アダムによって罪と死が入りましたが、第二のアダムであるイエス様は、罪を取り除き、命をもたらしてくださるのです。一つの園で悲劇が始まりましたが、もう一つの園ではその悲劇を取り除くために、イエス様が祈りに従事してお

られるのです。

2A 杯の意味するもの

1B 苦しみの杯

イエス様は、「この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈られました。この杯は何を意味しているのでしょうか？その前に、そもそも杯は、聖書の中でどのように使われているのでしょうか？それは、「自分の体の中に入れる」という意味合いがあります。それを手にするだけでなく、中に入れて、その結果を自分自身も体験するということです。

そして何をご自分の体の中に入れられるかといいますと、第一に、「アダムが罪を犯したことによってもたらされたあらゆる苦しみ」と言ったらよいです。悪者の企み、悪意、高ぶり、怒り、蔑み、罵り、拒絶、欺き、偽善、よこしま、暴力など、イエス様はこれから受けて行かれます。そして、そして鞭打ちや十字架によって、ご自身の肉体が著しく損傷を受けます。拳による打撃、茨の冠によって刺される傷、鞭打ちによって肉体が裂かれること、そして釘によって手足が刺され、また槍によってわき腹が刺される事。ですから、悪による苦しみのみならず、そういった肉体の損傷によって、病気も含む肉体の苦しみもご自分の身に受けられます。ヘブル書の著者が言いました、「2:9-10 ただ、御使いよりもわずかの間低くされた方、すなわちイエスのことは見えています。イエスは死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠を受けられました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。多くの子たちを栄光に導くために、彼らの救いの創始者を多くの苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の存在の目的であり、また原因でもある神に、ふさわしいことであったのです。」

2B 神の御怒りの杯

そうした苦しみの杯があります。けれども、それ以上にイエス様が過ぎさらせてほしいと願われたのは、「神の怒りの杯」です。旧約の預言者たちは、神の怒りをもろに受けることを、憤りの杯であるとか、飲んだ後に酔いどれのようになるという表現を使いました(例:エレ 25:15、イザ 24:20)。そして、黙示録では終わりの日に、神に逆らう者たちが飲む怒りの杯があることを教えています。「14:10 その者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた、神の憤りのぶどう酒を飲み、聖なる御使いたちと子羊の前で火と硫黄によって苦しめられる。」

イエス様が十字架に付けてから、初めの三時間は、人々からの罵りを受けておられました。そういった精神的に苦痛がありました。けれども、正午になって空が暗くなりました。神が天をも用いられて御怒りを表しておられるのです。そして午後三時に「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。(27:46)」と叫ばれたのです。イエス様は、私たちが恵みによって義とみなされるために、ご自身が神から罪とみなされるようにされ、その罪のゆえに神との断絶を十字架上で味わわれたのです。永遠の昔から、御父のふところにおられた方ですから、初めて味わう断絶です。永遠の断絶、つまり地獄の苦しみです。このことを私たちは、想像すらできませんが、イエス様の願いは、この杯を過ぎ去らせてくださいというものだったのです。

3A 「できますならば」

1B 十字架以外の救いの可能性

イエス様は、この杯を「**できることなら**」過ぎ去らせてくださいと言われていました。イエス様は、何をもって出来る事なら、と言われているのでしょうか？それは、「十字架以外の方法があるなら」ということでしょう。もし、人間の何らかの努力によって救われる道があるならば、ということです。人が誠実さによって救われるならば、どうかこの杯を過ぎ去らせてくださいということです。人間づきあいがよければ？道徳的なことによって救われるならば、宗教熱心によって救われるならば。または、伝統や儀式を守っているならば、ということかもしれません。これらのことで、人が救われるならばそうしてください、とイエス様はお願いしているのでしょう。

2B 十字架のつまずき

しかし、それでは救われないことを知っておられた父なる神は、ご自分の御子を罪の供え物にする以外なかったのです。人は自分自身で救えなかったのです。ですから、十字架によってのみしか救いの道はありません。ゆえに、十字架の言葉は人をつまずかせます。十字架のことばは、「あなたには、自分自身で救われることは全くできないのだよ」と教えるからです。「ガラテヤ 2:21 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。」

4A 「あなたが望まれるままに」

1B 御父への信仰

そしてイエス様は、「**しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください。**」と言われました。ここが、イエス様が霊の戦いに勝つことのできた分岐点です。ご自分の願いではなく、御父の願われていることこそが最善であるとする、信頼です。

ところでこれが、非常に大きな霊の戦いであることを知る必要があります。イエス様は公の働きを始めるに当たって、悪魔から誘惑を受けられました。ルカの福音書には、「悪魔はあらゆる試みを終えると、しばらくの間イエスから離れた。(4:13)」とあります。しばらくの間であります。では、いつ来たのかというと、サタンがイスカリオテのユダに入ったことがルカの福音書やヨハネの福音書に書かれています(ルカ 22:3、ヨハネ 13:26)。そしてイエスを捕えに来た者たちがいた時に、イエス様は、「しかし、今はあなたがたの時、暗闇の力です。(ルカ 22:53)」と言われました。したがって、サタンが背後で強く働いているのです。

何をもって働いているか？それは、「自分の願い、自分の意志をかなえる」ということです。神の願いではなく、自分の意志を押し通しなさいということです。そう、蛇がエバに初めに惑わしたあの誘惑そのものです。どうでしょうか、あまりにも当たり前人間の世界では、いや、キリスト教会にさえ偽りの教えとして、「あなたの願いがかなえられます」と教えていますね。これはサタンから来ているのです。神の願い、神の御心こそが最善なのです。御心でないものは、最善以下なのです。

そこで大事なことは三つです。一つは主なる神に信頼するということです。たとえ自分が理解できなくとも、全ての悟りを主に任せること。イエス様も、十字架で息を引き取られる時に、「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。(ルカ 23:46)」と言われました。ゆだねる、また任せるというのは、神の懐の中に自分自身を任せきってしまうことです。信頼しきってしまうことです。手術台に乗っても、その執刀医を完全に信頼して、その治療をしてもらうように任せてしまうことです。イエス様は、この祈りをささげることができたので、決定的な勝利をサタンに対して得ました。これからが実際の苦しみですが、そのゆだねきったイエス様の魂はすでに勝利しているので、大きなぶれは無かったのです。「ですから、神に従い、悪魔に対抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。(ヤコブ 4:7)」

2B 御父への従順

そこで大事な二つ目のことは、「従順」です。従順とは、たとえ理解できなくとも、自分をその言いつけられたことに従わせることです。子どもが躰けられる時に、なぜ躰けられるのか理解できないですが、父がそう言っているのだからという理由だけで、自分を従わせます。それが従順です。イエス様は、人として従順を学ばれました。「ヘブル 5:8-9 キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり、」イエス様も学ばれたのです。御子ですから、何一つ知らないことはないです。けれども、人の姿を取られて、人の苦しみを通られ、それで従順を学びました。

3B 御心の優先

そして最後に大事なものは、優先です。自分の願いよりも、神の願いを優先させることです。まず、「自分の願いを言い表すことを、神は受けとめておられる」ことは知る必要があるでしょう。イエス様のご自身の願いを言い表しておられました。願いそのものが間違っているわけではありません。そうではなく、自分の願いを神の御心よりも優先させることがいけないのです。そういう自分の願いと、けれども父なる神の願いを知って、父の願われていることに自分を譲ることを学びます。どうか、いつも、「あなたが願われるようにしてください」ということができますように。

そうした中で、イエス様は捕えられます。しかし、主は祈りの中ですでに勝利しておられました。十字架への道は、確かに陰しいですが、本当の戦いは既に終わり、勝利しておられました。イエス様の表情はこの後、確信に満ちていたことでしょう。完全に御父の御心にゆだねきったその心を、サタンも誰も奪うことはできません。「ロマ 8:38-39 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」どんなことがあっても、神の愛から私たちを引き離すことはできません。勝利したイエス様の中にいれば、イエスの勝利をもって圧倒的に勝利することができます。